

「それでも語り掛ける方」

あまり公にすべきことではないでしょうが、皆さんは腹が立って怒る時って、どんな態度をとられるのでしょうか？ ちなみに、私自身は黙り込むことが多いかな、と思います。もちろん、子どもに対しては注意するとか叱るとか理由があって、大声出したりもしますが、大人に対しては余計なイザコザとか勘弁したいので、ひたすら黙ってやり過ごす、ということが多いように思います。

ただ、本当は主張したいことがあるのに、押し黙るわけですから、短期的には無難で良くても、長期的に見れば自分の心の健康や、他者との健全な関係性という点では、色々と問題を含んでいるのかも知れません。「アンガーマネジメント」という言葉があって、怒りを制御することは社会人として必要なことではありますが、でも、怒りたい程の感情の高ぶりを、さも無かったことのように振る舞い続けるのは、それはそれで体に悪そうな気がします。

あともう一つ。あえて怒ったりしない、という選択の裏には、「どうせ言っても伝わらない」という諦めがある場合も考えられます。本当は、この怒りをぶつけて取っ組み合うみたいに分からせたい、分かり合いたいだけけれど、そんなことしたって相手はきっと分かってくれない、と思うと、怒る体力を使う分だけ馬鹿らしくなってしまう、ということもあるかも知れません。

きっと何か意味があるから怒りという感情を私たちは持っているのだと思うのですが、その上手な使い方を実はまだよく分かっていないのかも知れません。喜怒哀楽の内、多分、怒りが一番取り扱いの難しい感情なのだろうと思います。

旧約聖書に書かれている神様は「怒りの神様」と言われることがあります。今日の聖書箇所もそうですが、人に対して怒っている神様の姿が、よく書かれているからです。確かに、新約聖書に比

べたら、旧約聖書の方が、神様は沢山怒っているように見えます。もっとも、新約聖書の方では、イエス様が神殿境内で怒って大暴れをしたという「宮清め」の出来事も書かれてありますので、新旧約聖書のどちらにも怒りの感情は記されています。神様も、イエス様も、怒っているのだから、私たちも怒っていいんだ、という単純な結論に飛びついたりはしません。しませんが、ただ、どんな風に怒っているんだろう、という観察はしてみたいと思います。もしかしたら、私たちの怒り方の参考になるかも知れません。

今日の聖書箇所が含まれているエレミヤ書は、バビロニア帝国によって侵略されたイスラエルが舞台となっています。戦いに敗れ、国民の大半は、バビロニア帝国へと連れ去れてしまいました。

「バビロン捕囚」という出来事です。預言者であるエレミヤは、バビロン捕囚には加えられず、逆に戦いで荒廃した聖都エルサレムに残された側の人でした。連れ去られた人たちも可哀そうですが、見るも無残な都に取り残された方も安らかでは有り得ません。エレミヤ書は、荒廃した瓦礫の中で、神様を見上げつつ語り残された言葉であると言われてしています。

そんな背景があるエレミヤ書ですが、今日の聖書箇所に登場する神様は、憐れみではなく、明らかに怒りをもって語られています。「主はこう言われる。お前たちの先祖は、わたしにどんな落ち度があったので、遠く離れて行ったのか。彼らは空しいものの後を追い、空しいものとなってしまった」。これは、言ってみれば、神様は何ら悪いことはしていないのに、イスラエルの民は勝手に迷い、勝手に背き、その結果、自ら不幸を招いた、ということです。そのことを、神様は静かに指摘されている。6節にある御言葉も静かだけれども、深い悲しみによって生まれた神様の怒りが込められています。「なぜ私を求めなかった、尋ねなかった」と。過去、なんにも愛したのに、守ったのに、導いたのに。なぜわたしのことを求めず、他の神々に心奪われてしまったのか、と。そういう神様の告発ですね。7節に書かれてあることも、神様の恵みに対する人々の不義理と言います

か、感謝や賛美とは真逆の不正行為について触れてあります。

こういう神様の告発、怒りの発露について、そこに福音を求めることは難しいと言えます。悔い改めや反省を促すことが、この聖書箇所の本来的な目的なのだろうと思います。しかし、一方で、こんな読み方もできます。「神様って諦めない方なんだな」と。このエレミヤ書に記録されているバビロン捕囚という出来事は、神様が最初に下した裁きではありません。人々は過去に何度も何度も失敗して、その度に神様に怒られて、反省してきました。そして、その反省も空しく、何度も何度も失敗をして、同じようなことを繰り返してきました。いい加減、神様もそんな人々を見限って、最終的な破滅をもたらすことがあっても良かったのかもしれない。しかし、神様は、そうはされなかった。何度も何度も呼び掛け。無視されても、呼び掛け。御言葉を重ね、御心を伝え、それらを聖書という書物にまでまとめて、常に私たちに語り掛けてくださっている。神様って本当に諦めない方なんだな、と思います。

神様の怒りの御言葉に触れるのは楽しい経験じゃありません。また、信仰があっても無くても、神様の怒りには、どこか身勝手なところが見えてしまうのも仕方ありません。しかし、私たちが怒りの感情を面倒臭がり、それを押し殺したり、あるいは諦めて飲み込んだりすることがある中で、神様は「言っても無駄」とか思わずに、ちゃんと言葉にして伝えてくれている。多分、それは神様が私たちのことを、どこまでも信頼してくれているからだと思います。この御言葉を聴くに値する、賢い存在であると。時々失敗してしまうけど、そのことを反省でき、次へ生かすことのできる存在なのだ。神様は、私たちのことを高く見積もってくださっているのです。そして、究極的なところを言えば、神様は、イエス様の十字架という大きな徴を私たちに与えてくださっていて、これを心に思うたびに悔い改めと感謝を持つようにと期待してくださっているのです。

だから、出来れば、私たちはそんな神様の期待に応えていきたいと思います。それは神様を喜ば

せるためでもあります。そもそも神様が喜んでくださるのは、私たちの穏やかで幸せな毎日です。謙虚な思いで神様の感謝できること。良い事も悪い事も神様に打ち明けて健やかであること。神様に愛されている隣人を大切にすること。なんてことはない、そんな基本的な信仰の表し方で、神様の御言葉に応じて参りたいと思います。

怒りの御心さえ包み隠さず、私たちに示してくださる神様に信頼しつつ。今週も主の御用のために、そして、神様に愛されている私たち一人一人の幸せのために、言葉と行いを整えて参りたいと願うものであります。

神様。今日も私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたは、聖書を通して、時に鋭い御言葉を語られることがあります。私たちは、その鋭さに心乱され、あなたの持つ怖さの側面ばかりを見つめてしまうこともあります。しかし、あなたの御言葉はすべて、私たちのことを諦めず、手放さないがゆえの御言葉であると信じます。私たちが反省し、悔い改め、今日よりも平和な明日を生きるために必要な御言葉を、どうか豊かに注いでください。あなたに語り掛けてもらえる立派な信仰者であることを自覚しつつ、大切なあなたと尊い隣人のために心を尽くすことができますように。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。

聖書：詩編 145 編 8～14 節

主は恵みに富み、憐れみ深く、忍耐強く、慈しみに満ちておられます。主はすべてのものに恵みを与え、造られたすべてのものを憐れんでくださいます。主よ、造られたものがすべて、あなたに感謝し、あなたの慈しみに生きる人があなたをたたえ、あなたの主権の栄光を告げ、力強い御業について語りますように。その力強い御業と栄光を、主権の輝きを、人の子らに示しますように。あなたの主権はとこしえの主権、あなたの統治は代々に。主は倒れようとする人をひとりひとり支え、うずくまっている人を起こしてください。

神様。

今、私たちは少しずつ暖かさが感じられる、この季節に、あなたから尊い命を与えられ、生きる者とされた3月生まれの誕生者の方々を憶えて祈りを合わせています。あなたは、私たちが生まれる前から、私たちの名を呼び、今に至るまで導いてくださいました。この3月生まれの方々も、人生の様々な局面において、主の助けと慰めと祝福を与えられたものと思います。そして、その恵みに気づき、信仰を告白し、今日も主の日を共に過ごしています。どうか、この3月生まれの方々が、これから先の日々においても、あなたの御守りの内に、幸いを感じ、恵みを数えて歩むことができますように、しっかりとその御手で支え、また励ましてください。御国に帰る、その日まで、主と共にある祝福された毎日を過ごすことができますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。